

義經の妻妾 下

土田龍太郎

判官主従の衣川の館にて討死せしは文治五年閏四月卅日のことなりしかど、義經最期のさま吾妻鏡にはただ、豫州入持佛堂、生害妻子、次自殺云々とばかり述べていと言少ななり。妻廿二歳、女子四歳と記せる夾註あれども、靜とは異人なりしこの妻たれなりしや、姓氏だに知られねば、おぼつかなきこと言はむかたなし。さはれ義經の身にそひてはるか陸奥國までさすらへゆき、かしこにてつひに同じ日に命落せし妻のありしことのみはをさをさ疑ふまじきにこそ。このこと源平盛衰記にも述べたれども、かの典には義經の妻の河越氏の女なりしこと記せり。久我大臣の息女の義經に隨ひてより平泉にてともにみまかりしまでのことどもつぶさに語れるは義經記なれども、この北方の久我家の姫なりしこと語れる典、義經記のほかさらになければ、あまたなりし義經の妻の中に久我家に生ひ出し人のまことにありたりしやいなや、しかと知らむにさしたる手立てのあるべくもあらぬこそいとあいなきわざなれ。

そもこの義經記著せるはいかなるものなりしや、作者だに定かにはえ知られず。これにつきてはむつかしき論あげつちひくさぐさありげなれども、それはここに勘へでもありなむ。さはれおほかたは盲たる唱導者の語りによれりとおぼしき巻々ありて、あはれにおもしろく説きなせる話少からざれども、まことしからぬことどもまたうちまじれり。中つ頃都にて警官傳授を掌つかさどりしは久我家にほかならねば、義經に添ひとげし妻を久我家の姫と言ひなせしは、かの家に縁り淺からざりし盲たる唱導家の作爲ならずとも定めがたかるべし。

靜の天龍寺にて得度せしこと記せる義經記のかの寺の開創ありし貞和年間に先立ちて世に出でしことわりあるべからず。かく世降りて成りし義經記にはそらごとがましきこと多く見ゆれば、義經の妻妾のことども考へむにこの書定かなる證しとなしがたくて、まめまめしき史籍舊記に並べ用ゐむはいと危ふかるべし。大日本史義經傳に註記ありて言へらく、

世有義經記、事迹最詳、雖繁碎 駁、多傳會之說、而未必皆虛誕也、然無他可證、眞僞難辨、故一切不取

と。さればこの義經傳に義經の妻として靜のほか河越重頼の女と平時忠の女ばかりこそ載せたれ、久我大臣の息女に言ひ及ぶことのなきは、この姫を判官の妻なりとせる典、義經記のほかにはたえてあらざるがゆゑなること明けきなり。

義經記の語れる久我家の姫のこと、まことなるやそらごとなるや、はた義經の正室、久我家の姫ならで盛衰記に言へるごとく河越氏の女なりしや、あながちにあなぐらひてもせむなければ、それはここに論はでもありなむかし。うつつに世にありしにもせよなかりしにもせよ、義經記作者の叙ぶる久我家の姫のふるまひのいとらうたく心ばへのやさしくたへなること否むべくもあらず。姫のことかくまでゆかしく書きなせる筆の巧みなめならず、おぼろけのわざともおぼえねば、作者たれなりしやつひに明しえねども、この人げに無名の大才なりと言はむも誤りなかるべし。

光源氏と契ありしかの常陸宮の息女とこの姫と人がら同じとはえ思ふまじけれども、早くみなしごとなりていとはかなげに月日を送れりしこの北方、人目にはただいはけなく心ぼそげにてややもせば消え入らむばかりにも見えにけむとさへおぼゆればこの姫の末摘花と似かよへるかたなしとしも言

ひがたかるべし。義經のかつて久我大臣の住まへりし一條今出川の荒れたる邸に、茂る葎の露分けてしのびて訪ひしことを述ぶるところ義經記にあり。ここにて作者、源氏物語蓬生卷に習ひて文綴れりしことげにまぎれなし。

この時義經明けなば陸奥に落ち行かむその先に、しばしの暇告げやらむとてこそ姫をとぶらひたりしか、姫さらに肯はず、涙もせきあへで、ただ夫に伴ひ行かむことをせちにこひうちくどきてやまざりしかば、義經主從拒みあへで、姫の丈にあまれる髪をふつと切り兒ちのよそほひなさしめて、もろとも陸奥さしてぞ出で行きける。

住みなれし宿の障子の引戸のもとにかねて姫の書きすさみゐたりし

つらからばわれもこころの變れかしなどうき人の戀しかるらむ

てふ一首、この時主從の心を動かせしことただならず。夫を慕つてやまぬ憂き思ひをかくまで心深く、さはれいとさりげなきままに詠みなせる詩歌ほかにまた多くありとも思はれず。めでたくあはれなることたとしへなし。

平泉への道すがら、この姫の身にとりてつらく危かりけること少からで、かしこに到りしは文治二年暮つ方にてぞありける。同じ四年師走に藤原秀衡みまかりて、明る年の卯月、子息泰衡頼朝に興し、また院宣さへ蒙りて、義經主從を衣川の高館に攻め、判官つひに自害せしことなりゆき知らぬ人ありとも思はれず。

この時判官、北の方をとまかくも長らへしめて、いづくにてもあれ落さしめむとはかりしかども、姫さらに聽かず、夫もろとも黄泉路に赴かむの志固くして、つひに老いたる傳人もつひと増尾兼房の刃に貫かれてぞ息絶えける。この姫のいまだいとけなき頃より長く仕へゐたりし兼房、悲しみに眼もくれて刃のあてども知られず、ただひれ伏すほかなかりければ、北の方これをあながちに促し勵ましめむとて、わざと聲あららげて兼房を罵り恥しめければ、老武者かくてはほかにせむすべあらばこそあらめ、姫の肩を押へてつひに刃を刺しとほしてけり。日頃はただやさしくかよわくのみ見えし姫の今はのきはなになりてかくまでつよくいさぎよかりけること、讀むに思ひのほかなれども、かかる心にくき書きざままた義經記作者の筆の巧みのおぼろけならぬを知るよすがたるにたれり。

ここに久我の姫を靜に比べみるに、生れつきたる心ばせいたく異りて似よれるところ多からず。あえかにはかなくらうたきこと姫にいちじるく、心たけくさかしき方は靜にきはだちたり。あてなる姫と白拍子と心ばせ同じからざるは怪しむにたらねども、あくまでみさを固く、夫を想ひてやまず身をつくしても戀ひわたる志のいみじくあはれなること、姫と靜といづれまされるをわきて言はむはげにいとかたかるべし。

(平成三十年三月十五日受附)